



王子田 彰夫

(九州大学薬学研究院 教授)

おうじだ・あきお / 1995年 九州大学大学院薬学研究科博士後期課程修了、1995年 分子科学研究所非常勤研究員、1997年 武田薬品工業(株) 創薬研究本部研究員、2001年 九州大学大学院工学研究院助手、2005年 京都大学大学院工学研究科助手、2006年 科学技術振興機構さきがけ研究員(兼任)、2007年 京都大学大学院工学研究科講師、2010年 九州大学大学院薬学研究院教授、現在に至る。

専門分野：ケミカルバイオロジー、創薬化学

私がIMSフェローとして分子研に赴任したのは1995年の10月の事でした。現在、東京大学大学院理学系研究科にいらっしゃる塩谷光彦先生が教授として独立され、ご自身のラボを構えるタイミングで「有機合成のできるポスドクを募集している」との噂を聞きつけて応募したところ、IMSフェローとして採用していただけることとなりました。私が赴任した当初、ラボは立ちあがったばかりでしたので、塩谷研には他のメンバーはだれもおらず先生と二人きりでした。塩谷研メンバーの記念すべき第一号といえ、ちょっと聞こえは良いのですが、専有できる居室もありませんでしたので、錯体化学実験施設にあった高橋保先生(現北海道大学)のラボの居室に一人机をおいて居候する何とも妙な日々が1~2ヶ月は続いたかと思います。その後にアメリカ留学から帰国した田中健太郎君(現名古屋大学)が助手として、塩塚理仁君(現名古屋工業大学)が私と同じくIMSフェローとして赴任して、しだいにラボが形作られてきました。

その当時の塩谷研の研究テーマは、金属錯体(イオン)とDNAとの超分子化学であり、DNAを認識する錯体型プローブの開発や、金属イオンとDNAの超分子複合体を人工構築するなどの斬新なアイデアに基づいた研究が開始されたばかりでした。分子研に赴任する

以前の私は、有機化学研究を専門とするラボの一学生でしたので、錯体化学も核酸化学もほとんど素人でした。「まずは新しくデザインした亜鉛錯体プローブをつくりましょう」と塩谷先生に言われるがまま、新しいテーマをいただいたわけですが、錯体プローブの有機合成法しか頭に浮かばない自分に大きな焦りを感じました。一方で、斬新なアイデアを立案して生き活きと新テーマをスタートしていくラボの体制を見て、「希望を持って新しい研究を伸びやかにやるということはこういうことなのか」と実感として気づかされた思いがしました。その年の九州の旧友に宛てた年賀状には「井の中の蛙、大海を知らず」と新天地にいる自分の心境を大書した記憶があります。

分子研には、その後一年半滞在しました。その間、錯体化学、核酸化学、超分子化学など自分に足りない知識をできる限り吸収しようと努めたように思います。一方で、あの当時の自分にとって異分野である錯体化学の様々な研究者とも多に交流しました。その過程の中で今に繋がる自分自身の化学研究のスタイルがしだいに構築されていったように思います。分子研を去った後に私は、武田薬品工業の創薬研究者として、がん領域の創薬合成研究に従事しました。分子研時代に比べると有機合成が近くなったとはいえ、薬

の開発研究は初めてでしたので、ここでも自分にとって異分野である分子生物学や創薬化学研究を改めて学ばなければならない状況にありました。その後さらに転身があり、その次に私は、蛋白質の生体機能化学研究を専門とする九州大学の浜地格先生の助教として赴任しました。浜地研では自分にとっての新たな分野となる蛋白質化学や蛍光イメージングについてさらに学びました。

以上の経歴が分子研出身者である私の今の研究の基礎となっています。現在、私は自身の母校である九州大学薬学部で研究・教育に従事しています。今の研究は一言で言いますと“ChemBioMed”になります。これは自分でつくった造語でChemical Biology & Medicinal Chemistryを短く言い表しています。研究テーマは比較的多岐に渡り、例えば例を挙げると「蛋白質を特異的にラベル化する亜鉛錯体の開発と電子顕微鏡イメージング応用」、「細胞内代謝を可視化できる蛍光プローブの開発」、「蛋白質と共有結合するコバンレントドラッグの開発」などが主な研究テーマです。一見して雑多なテーマ設定に思われるかもしれませんが、共通する研究の流れは、目的にかなった機能を持つ分子をデザインして生体の機能解析やモジュレートへと応用することであり、それぞれのテーマで目

指すアウトプットの行き先が少し違うにすぎないと私は思っています。これらの研究の根っことなっているのは学生時代から付き合いしてきた有機化学になるのですが、その根から派生する幹や枝は、分子研時代を皮切りとして様々な研究環境で学んできた、その時の自分にとっての異分野研究によって“接ぎ木”的に形成されてきたと思っています。一つの学問分野に深く専心し大事を成し遂げられる研究者が多くいらっしゃいます。それが理想的な一つの研究道であるのだらうとも思いますが、自分自身がこれまで辿ってきた道程は、それとは程遠いもので、今更やり直しも効きません。そうであるならば、自身の一風変わった経歴を活かした研究スタイルを突き詰めていく事が、他の研究者には見えないゴールにたどり着くための独自の方策になると信じています。植物の世界では、一つの木

に赤と白の花が同時に咲く現象を源平咲きと呼びます。これは源平合戦の赤と白の旗の入り乱れる様を例えたものです。これを超えて接ぎ木は、さらにいくつもの異なる種類の花を一つの木に咲かせることが実際に可能です。自身の研究でそんな事が実現できればよ

いなど考えながら、ラボの学生やスタッフと生命化学研究の新しい芽を育てる日々を過ごしています。



王子田研（九州大学薬学研究院生体分析化学分野）のメンバー



分子研を離れてから



松尾 司

(近畿大学理工学部応用化学科 准教授)

まつお・つかさ / 1994年3月東北大学理学部化学科卒業、1999年3月筑波大学大学院博士課程化学研究科修了、博士(理学)、1999年4月日本学術振興会特別研究員(PD)、1999年6月筑波大学先端学際領域研究センター助手、2001年4月分子科学研究所助手、2007年4月理化学研究所機能性有機元素化学特別研究ユニット副ユニットリーダー、2012年4月から現職。その間、2011年10月～2015年3月JSTさきがけ研究員。

ご無沙汰しております。2001年4月から2007年3月までの6年間、錯体化学実験施設の川口博之先生(現東京工業大学教授)のグループで助手をしていた松尾です。分子研では川口先生はじめ、多くの皆様に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。分

子研を離れて、早いもので11年が経ちました。十年一昔とは言いますが、分子研での日々がずいぶん懐かしいです。(久しぶりにおいしいひつまぶしが食べたい!)この11年の間に転職して職場が2回変わり、結婚して娘が二人できました。現在は大阪で暮らしています。

仕事も暮らしも想定外?の変化です。

私が分子研にいた頃は、お隣の田中晃二先生の研究室でCRESTが行われており、同世代の研究者が周りにたくさんいました。活気があって、ディスカッションしたり、飲んだりして、仲良くさせて頂きました。明大寺地区か

ら山手地区への引っ越しもありました。川口グループもびっくりするくらい広くて立派な実験室になりました。そのような恵まれた環境で、大好きな実験を心行くまで楽しんでいました。「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」の気持ちで、どんなアイデアでもすぐに試していたように思います。食生活の乱れのせいか尿管結石となり、岡崎市民病院にもお世話になりました（痛い思い出です）。

分子研を退職した後、埼玉県和光市の理化学研究所に5年間勤務しました。玉尾皓平先生（現豊田理化学研究所所長）の特別研究ユニットの副ユニットリーダーとして大変お世話になりました。分子研で培った経験を活かして、ポスドクたちと一緒に研究に打ち込みました。現分子研レターズ編集委員長長の山本浩史先生も、当時は理研におられ、研究員会議幹事会などで大変お世話になりました。「異分野交流の夕べ」を担当したのは懐かしい思い出です。理研では、研究者のレベルと意識の高さにプレッシャーを感じながらも、充実した日々を送ることができました。

2011年3月11日のことは忘れることができません。時限ユニットでしたので、期間内に成果を生み出すべく、チャレンジしては失敗しておりましたが、その日の午前中によく念願であったScience誌に論文がweb掲載されたのです。ケイ素の四員環化合物に関する成果で、筆頭著者のポスドクと一緒に喜び、プレスリリースについて話していました。喜びも束の間、その日の午後大きな地震が起きたのです。私がいたのは研究本館という理研でも古い建物でしたが、幸運なことに、私が理研に来る前に免震工事が行われていたので、実験室ではグラスコ1つ割れませんでした。理研でも大きな

被害が出た建物もありました。交通機関はストップしてしまい、私は自動車通勤でしたので夜遅くになってから車で自宅に帰りました。自宅は5階でしたが、食器棚が倒れて電子レンジが壊れ、重い本棚は大きく移動していました。都心で勤務していた妻は帰宅困難者となり、翌日に戻ってきました。もう研究どころではなくなっていました。おめでたいお祝いの日だったはずが、戦後最大の国難の日となったのです。人生で一度あるかないかという出来事が同じ日に起きてしまいました。

その後、原発の事故もあり、研究所はお休みで自宅待機となりました。そんなある日のこと、「おまえの論文の動画をつくったよ」と電子メールがありました。YouTubeを見てみると、英国ノッティンガム大学のPoliakoff教授が出演して論文の内容を説明する動画でした (https://www.youtube.com/watch?v=hY-p_-p4peU)。日本では大震災で大変なことになっているのに、世界では論文を読んでくれている人がいるんだ、と不思議な気持ちになりました。このYouTube動画の再生回数は18万回以上になりました。皆さんもご覧ください。

2012年4月から、縁があって大阪府東大阪市の近畿大学 (Kindai University) でお世話になっています。理工学部応用化学科で「応用元素化学研究室」を主宰して今年で7年目になりました。JST さきがけ「新物質科学と元素戦略」(研究総括: 細野秀雄先生) の温かいご支援で、分子研や理研と同じスタイルの実験室を立ち上げることができました。また、科研費新学術領域研究「感応性化学種が拓く新物質科学」(領域代表: 山本陽介先生) では、多くの先生に共同研究して頂き、サポートして頂きました。心より感謝申し上げ

げます。JST ACT-C では、川口先生とまた一緒に研究する機会を頂きました。学生の武者修行の機会も頂いております。心より厚く御礼申し上げます。

スタッフ1人の研究室ですので、なかなか思い通りにはいきませんが、幸いなことにこれまで大きな事故もなく、卒業生43名、修士14名、博士1名を輩出しました。博士後期課程に進学する人は少ないのですが、博士研究員や外国人の博士課程大学院生が短期留学に来る年もあります。できるだけ良い環境を学生に提供できたらと思います。近畿大学は、西日本で学生数が一番多い私立大学です。もともと理系の大学で、近大マグロは皆さんも試されたことがあるかもしれません。最近、志願者数の多い大学としても取り上げて頂いています。多くの学生を相手に講義や実験を担当しておりますが、大切な若者の未来をつくるという気持ちを忘れないでいきたいと思います。2021年には、「国際化学オリンピック」が近大で開催される予定です。

分子研・理研と研究所に11年間勤務し、大学の職を得ました。最先端の研究に取り組み、新しい発見、新しい価値観に触れることは、この上ない喜びであり、かけがえのないことです。そしてまた、世界中の研究者・ライバルたちとの競争でもあり、スリリングなサバイバルです。近畿大学の学生は、明るく元気があります。私の想定外? の実験で、思わぬ発見もありました。近畿大学からも1つでも多くの研究成果を世界に向かって発信したいと思います。学生には1つでも多くの自信や力を身につけて、社会で活躍してほしいと思います。



田園風景の中での研究、逆パウリ効果の発見



真壁 幸樹

(山形大学大学院理工学研究科 准教授)

まかべ・こうき / 2005年 東北大学大学院工学研究科博士後期課程修了(博士(工学))(熊谷研)。2005年~2008年 シカゴ大学 博士研究員(小出研)。2008年~2012年 分子科学研究所・岡崎統合バイオサイエンスセンター 助教(桑島研)。2012年より現職にて研究室を主宰。

現在の研究の興味: 蛋白質工学に基づいて新しい蛋白質骨格構造を作り出すこと。

2012年まで4年間お世話になった、分子科学研究所 岡崎統合バイオサイエンスセンター桑島研究室の助教を退職して、山形大学工学部に着任してから、もう6年と少しが経過しました。この間に上司であった桑島邦博先生も2013年3月にご退職され、所属していた岡崎統合バイオサイエンスセンターも発展的に解散しました。時の流れの早さには驚くばかりです。

現在、私が所属している山形大学工学部は山形県米沢市にあります(山形大学の本部や理学部などがある山形市から南に車で1時間くらいの所です)。米沢市は広大な田園風景が広がる置賜盆地の南に位置していて、特に初夏の水田の様子はいつまで見ても飽きない美しさがあります。自然が豊かで、春には官舎の庭で山菜のコゴミが収穫でき、近くの山ではタラの芽やコシアブラがたくさんとれます。休日には、借りている畑で野良仕事を家族でやっていて、初夏には毎週のようにおいしい野菜が収穫できます。このように身近な環境で植物に実際にふれて育つのをみると、土と種から育ていく農作物のすごさにいつも驚かされます。数学者の藤原正彦さんはその著書の中で、優れたサイエンスをするために「美の存在」が重要であることを述べられていて、イギリスが多くの天才を輩出

している理由の一つとして、美しい田園風景の存在を挙げられています。この観点からすると、米沢はまさに美しい田園風景と自然が広がり、良いサイエンスを生み出す土壌があります。

美しい自然環境に囲まれている山形大学工学部ですが、やはり地方国立大学であり、分子科学研究所のようなすぐく恵まれた研究環境というわけには、なかなかいきません。まず、研究室を立ち上げる時にはスタートアップ費用がある程度かかります。しかし、着任時に配分された金額は、実験系の研究室を立ち上げるにはかなり十分ではない金額で、ある分子研の先生からは桁がひとつ間違っていないか確認した方が良く、と言われるほどでした。ただ、補足をしますと、後になって分かったことですが、現在の国立大学では地方国立に限らず、旧帝大であっても十分なスタートアップが得られないことがよくあるようでした。どちらにしても、実験設備がないと研究が始められませんが、桑島先生がご配慮くださり、いくつかの実験装置を譲って頂きました。また出身研究室である東北大学工学部の熊谷泉先生からも装置類を譲って頂き、どうにか実験室を立ち上げることができました。さらに、研究室が立ち上がった後も、毎年研究を進めるのに多

くの消耗品を使います。しかし、運営費交付金から配分される研究資金はかなり限られているため、外部資金獲得が必須で日々研究費の申請を行っています(これはどこも同じだと思いますが)。研究テーマが限定されず、自由なアイデアの研究を行える運営費交付金が豊富である分子研をなつかしく思い出します。

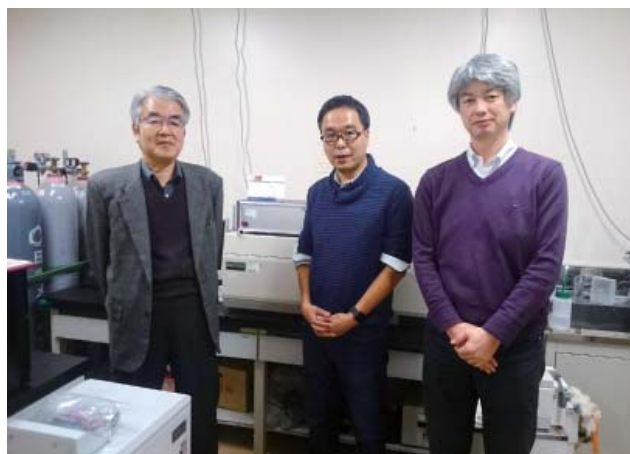
一方、大学での良い点は、毎年若い学生が研究室にやってくることです。山形大学工学部の学生はとてもまじめであることが特徴で、他の大学から来て頂いて講演をされる先生方はそのまじめな聴講態度に驚かれることが多いです(しかしまじめすぎて冗談があまり受けないという副作用もあります)。研究室には例年10名弱の学生がいて真剣に蛋白質工学の研究に取り組んでいます。

桑島先生が2013年にご退職され、先生の装置類はいくつかの研究室に移設されました。それら装置の一つにストップフロー CD装置があります。これはミリ秒オーダーの蛋白質の二次構造形成を観察することができる装置で、蛋白質の構造形成の仕組みを明らかにすることができます。桑島先生が長年かけて完成させた装置であり、溶液の混合後もミリ秒から、長い時間まで安定して測定出来ます。私が分子研時代

から研究していた、ある蛋白質の構造形成の研究でもこのストップフローCD装置が必須で、桑島先生のご退職後は装置が移設された、東京医科歯科大学の伊倉禎吉先生の所に米沢から訪問して測定を行っていました。研究結果をまとめるのにどうしても最後に必要な測定があり、時間を見つけては東京まで測定に行っていました。しかし、使い慣れたストップフローCD装置を正しくセットアップしても動作が不安定で調子が悪く、データが取れない状態が続きました。どうやっても解決出来なかったため、日程を調整して桑島先生に東京医科歯科大学まで来ていただいて一緒に解決方法を探すことにしました。実験の日に桑島先生と東京医科歯科大学を訪問しました。そして、装置のセットアップを完了し、問題の現象を見てもらおうとしたら、装置は完全に問題なく作動し、いくらやっても問題がおこりません。つまり、何もしていないのに桑島先生がいるだけで装置が直ってしまったのです。これは

まさに“逆 (retro-)”パウリ効果だと理解しました。パウリ効果とは、優れた理論物理学者であるパウリが実験装置に近づくとももしていないのに装置が壊れる現象です。パウリ効果の実験科学者版が逆パウリ効果です。優れた実験科学者である桑島先生は壊れた実験装置に近づくだけで装置が直るのです。これを読まれた方は、それはたまたまだろう、と思われるかもしれませんが、実際の、その通りなのですが、分子科学研究所で桑島先生の鬼気迫る実験科学への態度をそばで見てきた私には、そこに因果関係を感じてしまいます。装置が無事に稼働して、最後の実験データを測定できたため、分子研時代から取り組んできた、この研究を報告することができました (*J Mol Biol.*, **430**, 1799-1813, 2018)。

研究資金や研究時間などいろいろ課題はありますが、美しい田園風景のなかで研究ができていることに感謝しながら、実験科学者として「逆パウリ効果」を発現できるまで研究を邁進していきたいと思います。最後になりましたが、分子科学研究所での研究生活によって私は大きく研究の視野を広げることができました。今後も若い研究者たちの梁山泊として、ますますのご発展を祈念いたします。



東京医科歯科大学にてCDストップフロー測定。左から桑島先生、筆者、伊倉先生。この時に逆パウリ効果が現れた。



分子研を去って7年



全 炳俊

(京都大学エネルギー理工学研究所 助教)

ぜん・へいしゅん / 2009年3月京都大学エネルギー科学研究科博士後期課程研究指導認定退学、同5月学位取得：博士(エネルギー科学)。2009年4月～2011年6月 分子科学研究所極端紫外光研究施設 電子ビーム制御研究部門 助教。2011年7月から現職。研究テーマ：電子ビームを用いた各種量子ビームの発生・電子加速器・自由電子レーザー・コヒーレント放射光

加藤政博先生からの依頼を受け、丁度、現職の任期が一度切れ、再任されるという節目でもあり、筆を執りました。早いもので、分子研退職後、丸7年もの時間が経過しました。

私は幸運にも学位取得とほぼ同時に、2009年4月に極端紫外光研究施設(UVSOR)の電子ビーム制御研究部門の助教として採用され、2011年7月までの2年3ヶ月間、UVSORにて電

子加速器・放射光関連の研究に従事させて頂きました。学生時代は主に直線状の加速器を用いて赤外自由電子レーザーを発生させる研究を行ってきており、UVSORで初めて円形加速器である電子

蓄積リングに触れる事となりましたが、加藤政博先生の指導や先輩の阿達正浩先生（現高エネルギー加速器研究機構、助教）、技術職員の山崎さん、林さんの支援を受けながら、電子蓄積リングおよびそれに電子を供給する為の入射器の運転方法を習得し、円形加速器について色々と学ぶことが出来ました。当時は電子蓄積リングに逐次、電子を入射するトップアップ運転の導入に向けて注力している時期でした。それまでは朝と昼に二回、まとめて電子を入射していた為、入射器の長期安定性はあまり要求されていなかったのですが、一分に数回の頻度で四六時中電子を入射するトップアップ運転では入射器が長時間にわたり、安定に動作する事が要求されました。私自身は、この課題に対して各種装置の動作状況を監視するためのモニター系を充実させると共に、不安定な機器を見つけて、それを自動制御を用いて安定化させることで、入射器の安定性を向上させ、安定なトップアップ運転の実現に貢献するという貴重な経験を積むことが出来ました。開発した自動制御系は今でもUVSORの制御室で動作しており、日々、安定な入射に貢献していると聞いています。また、放射光関連研究においては、電子蓄積リングを用いた自由電子レーザー発生や、レーザーと高エネルギー電子ビームを利用したコヒーレント放射発生やガンマ線発生に関する研究に携わらせて頂きました。これらの研究は現在の私の研究課題の一つとなっています。

昔の話はここまでとして、ここからは退職後のあれこれを綴りたいと思います。分子研退職後は、京都大学エネルギー理工学研究所の量子放射エネルギー研究分野の助教として、中赤外自

由電子レーザー発生装置（KU-FEL）の開発研究を再開する事となりました。本装置は2008年に初発振と出力飽和を達成したものの、私の卒業後は人手不足や機器のトラブルの為、発振できない状況が続いており、最初の仕事はこの装置の再発振となりました。機器の修理や装置の調整などに、2ヶ月ほど時間が掛かりましたが、2011年9月8日に装置の再発振を達成する事ができました。丁度、この年から京都大学エネルギー理工学研究所が文部科学省の共同利用・共同研究拠点『ゼロエミッションエネルギー研究拠点』という事業を開始しており、このKU-FELも共同利用装置の一つとなっていたので、滑り込みセーフで再発振でき、最初のユーザー利用実験をこなす事ができました。当初は安定度も低く、波長可変範囲も10～13 μmと狭かったのですが、その後、自動制御を用いたKU-FELの安定化や主要装置の入れ替えなどを行い、現在では波長3.5～23 μmで発振可能な国内最高性能を誇る中赤外自由電子

レーザーとして、学内外の研究者に広く開かれた装置となっています。大学の1研究室が運営する加速器施設であり、技術職員さんも居らず、他の先生方(教授・准教授)は忙しくて時間がとれないので、ほぼ私一人で装置のメンテナンス・運転・ユーザー対応を行う形となっています。加速器の運転がシフト制で、技術職員さんが沢山居たUVSOR時代が懐かしくもありますが、忙しくも楽しい日々を送っています。装置の故障に対するリスクマネジメントやユーザー対応などについて、UVSORの運転や維持管理業務に携わった経験が生きていると感じています。KU-FELはUVSORと比べるとまだまだ歴史も浅く、予算規模も遥かに小さく、利用者も少ないのですが、利用者数は年々少しずつ増加傾向にあり、2018年度には10件の共同利用・共同研究が実施されており、これまでの共同利用・共同研究で実施してきた研究成果がようやく論文という成果として形になってきています。宣伝になりますが、もし、中



京都大学小型中赤外自由電子レーザー（KU-FEL）施設にて。

赤外自由電子レーザーを用いた研究に興味を持たれた方は、ご連絡頂ければ幸いです。また、4年ほど前より、更に小型の新しい加速器を立ち上げ、準単色THz放射の発生研究を行っています。本装置では、一昨年度にTHz光発生を達成しました。期待したほどの強度が得られていないので、どの様にして強度を高めて特色ある光源としていくか思案しており、研究の醍醐味を味わっています。

一方、分子研退職後も、協力研究という形で加藤政博先生との自由電子レーザーやコヒーレント放射光発生、ガンマ線発生・応用に関する共同研究を

行っており、継続してUVSORの皆さんにお世話になっております。ここ数年はガンマ線発生とその応用に注力しており、電子蓄積リングを周回する高エネルギー電子に正面から大強度レーザーを衝突させて発生させたガンマ線を用いて、核共鳴蛍光散乱を用いた同位体分布断層撮影技術の開発や光子・光子相互作用の一つであるDelbrück散乱の測定に向けた研究等を精力的に行っています。ガンマ線を使った研究はこれまでは協力研究の枠組みでの利用に限定されていましたが、本年度後期からUVSOR施設利用という、他の研究者の皆様にもオープンな形で利用可能

となる予定です。ガンマ線利用に関しては、必要に応じてサポートすることで、僅かでも分子研・UVSORに恩返しできればと考えております。

私自身は、実験や打ち合わせの為に最低でも年に2～3回は分子研・UVSORを訪問しているので、もし見かけたら、『分子研レターズの近況記事読んだよ』と気軽に声を掛けて頂ければ、嬉しく思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

所内活動

新人歓迎BBQ 報告

2018年5月15日（火）夕刻、分子研の中庭に於いて、新人歓迎BBQパーティーが盛大に開催されました。研究所全体での新人歓迎会は、著者が知る限り今回が初めてです。

当日は、最高気温が29℃に迫る好天の下、110名を越える方々がご参加下さいました。所長のご挨拶と乾杯のご発声で始まったパーティーは、新人歓迎会に相応しく、大変賑やかで和やかに、盛会のうちに終了することができました。今回は、肉魚グリルに加え、たこ焼き、餃子、アヒージョ、チーズフォンデュ、フルーツポンチなど、目新しい料理も満載で、胃も心も満たされる会となったのではないかと思います。

参加していただいた皆様、そして運営準備にご尽力下さった全ての皆様に、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

(繁政 英治 記)

